

京都府立医科大学の「いま」を伝える広報誌

◎特集

2022年  
創立150周年を迎えて

～未来へ繋ぐ～



京都府立医科大学の「いま」を伝える広報誌

COMMUNICATION MAGAZINE

The KPUM  
TIMES

vol.  
10

CONTENTS >>

### 03 | 竹中学長 退任の挨拶

特集

### 04 | 2022年 創立150周年を迎えて ～未来へ繋ぐ～

- トリアス祭/オープンキャンパス
- ゴールドリボン小児がんチャリティーウォーキング/  
オープンホスピタル
- 国際シンポジウム/記念式典・記念講演・祝賀会
- 服部匡志特任教授マグサイサイ賞を受賞/  
創立150周年記念事業実行委員会 委員長挨拶

### 08 | TOPICS

- 第12回 4大学連携研究フォーラム
- 看護学教育 領域別臨地実習
- 令和4年度 白衣授与式/大学フェロシップ

### 12 | 新任教授紹介

- 老年・在宅看護学領域 毛利教授
- 成人看護学・がん看護学領域 吉岡教授

### 13 | 学生団体紹介

- KiSAの取り組み

### 14 | 卒業生からのメッセージ

- 河原柚香 さん

### 16 | 寄附のお願い



京都府立医科大学 本部棟

アーチ状の窓ガラスが特徴的な本部棟は昭和3年に建築されました。当時の建築様式を反映したデザインや意匠が現在も佇んでいます。

# 京都府立医科大学に感謝と期待

京都府立医科大学学長 竹中 洋



令和5年3月末日をもって2期6年間の学長職を辞すことになります。多くの教職員の皆様に支えられて過ごした年月を振り返る機会を頂きました。幾つかの課題に分けて簡潔にまとめたいと思います。

### ① 私の時代認識

現在の我が国は、明治維新と第二次世界大戦直後に匹敵する、或いは、お手本が全く存在しない意味では未曾有の社会的混乱期にあります。学制発布150年を迎えてわかるように、これまで日本社会の近代化を支えてきた大学が未だに当時の縦割り型アカデミアの課題を解決できておらず、社会育成の基盤が不明瞭であることは極めて大きい要因です。また、人の一生を科学する分野としての医学・医療や福祉が体系化されていないことも喫緊の課題です。

### ② 大学の在り方

大学のステークホルダーは学生です。学生にどのような教育サービスを提供するのか、教職員の意識が十分に熟成していません。大学が学生を選ぶ意識が強く、選ばれる大学の観点から教育・研究環境の整備を考えてきましたが、道半ばです。

### ③ 医学部には附属病院を置かなければならない

学部教育のための附属病院は特定機能病院としての多様な顔を持っています。京都府の医療提供体制の中心に座る義務は「公立大学」のミッションでもあります。この意識は常に質保証の対象となるものですが、時にそれが忘れられそうになります。注意事項です。

### ④ 研究の方向性について

基本的に本学は科研費獲得で語り語られる傾向があります。科研費は個人研究費であり、講座の大学院生の研究課題として大きな人的絆の原点でもあります。一方で、AMEDやJSTの様な競争的外部資金は大学を超えて研究の質が問われるものです。多くの研究者の間で先見性や実力が評価されることが前提です。もう少しこの方面での研究展開を期待しています。

### ⑤ 教職協働について

私は、「教職協働」「温故知新」並びに「Never give up」を掲げて学長に就任しました。昨年10月に大学設置基準が改定され、教職協働はまさに大学の最優先事項です。具体化は法人次第です。

最後に教職員の皆様への感謝と、本学の新しい目覚めに大いに期待して4月を迎えたいと考えています。



特集 2022年 創立150周年を迎えて ~未来へ繋ぐ~

## 150周年WEEKの様子をお届けします!

京都府立医科大学は2022年11月1日に創立150周年を迎え、この1年間を150周年イヤーとして様々な記念行事を展開しました。なかでも、11月3日~5日を150周年WEEKとして連日イベントを開催し、全学一丸となり創立150周年を盛り上げました。その様子をお届けします!

### 11月3日 トリアス祭・オープンキャンパス

150周年WEEK



トリアス祭実行委員会

今年度のトリアス祭は「UN150N(ユニゾン)」をテーマに、Trias(学生・教職員・地域住民の三位一体)で「京都府立医科大学らしい特別な体験」を共有することを目指して計画・実施しました。また、コロナ禍により過去のトリアス祭を一度も経験したことのない実行委員によって運営されました。オープンキャンパス企画の「医学へのとびら展」や大学周辺の飲食店とコラボレーションした「京都府立医大もぐもぐフェスティバル」、公共交通機関での広告など、例年になく新しい企画を様々な形で展開しました。今年度は本学創立150周年という大きな節目の年であり、創立150周年記念事業実行委員会の先生方にもご協力を賜り、「大同窓会2022」という本学のOB・OGによる講演会や「学部学生と共に学ぶ京都府立医科大学の歩み」と題して本学の歴史を振り返るトークショーなどを催行しました。「大同窓会2022」では北山修先生(昭和47年卒)を含め、多様なキャリアを持つ多くの先生にご登壇いただき、本学学生の将来の指針となるだけでなく、来場いただいたOB・OGの先生方と学生の交流の場ともなりました。

また、中学生、高校生向けのオープンキャンパスイベント「医学へのとびら展」では本学の様々な教室にご協力を賜り、医学をテーマとした目を見張る多数のイベントを行うことができ、大変

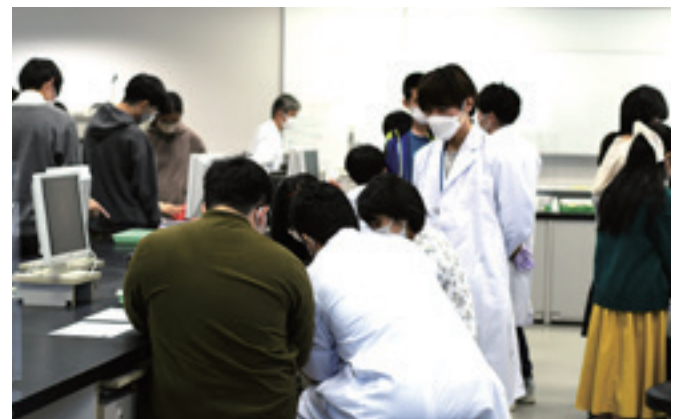
好評な企画となりました。参加者には「京都府立医科大学らしさ」を直に体験し、本学の魅力を感じていただけたと思います。

コロナ禍にあり、手探りから始めた学園祭でしたが、実行委員会のメンバーだけでなく、その他の学生や多くの教職員の方々、ご支援いただいたOB・OGの先生方のおかげで、例年以上に盛大なトリアス祭を実現できました。次年度以降のトリアス祭では、実行委員会の学科・学年の幅を広げ、より学生全体で作り上げるという雰囲気を作っていきたいと考えています。

(トリアス祭実行委員一同)



大同窓会2022



オープンキャンパス「医学へのとびら展」の様子

## 11月3日 ゴールドリボン小児がんチャリティーウォーキング

150周年WEEK



認定NPO法人ゴールドリボン・ネットワーク様の協賛で、京都では初めてとなる小児がんの子ども達を応援する「京都府立医科大学創立150周年記念 ゴールドリボン小児がんチャリティーウォーキング」を開催しました。当日は約850名の方々にご参加頂き、ボランティアとして病院の職員、学生さんにもご協力頂き

ました。好天に恵まれ、色づき始めた紅葉を楽しみながら、鴨川河川敷を皆さんそれぞれのペースでウォーキングを楽しんでおられました。これを機会に、皆さんに小児がんについて理解を深めていただき、小児がんの子ども達や経験者が社会で豊かに暮らせることを願っています。



## 11月3日 オープンホスピタル

150周年WEEK

3年ぶりとなるオープンホスピタルを開催しました。

規模を縮小した中での開催でしたが、当日は多くの方にご参加いただけ、とても盛り上がりました。

### リレー講座

新型コロナや身近な病気について6人の先生が講演し、参加された方からたくさんの質問や感想をいただきました。

### What is 医療従事者?

当院で働く医療従事者達が日常の仕事内容などを詳しく紹介しました。将来、府立医大附属病院で働きたいと思ってくれたら嬉しいです!



### 感染防具着脱講習会

コロナで話題になった、あの青い服を着て心臓マッサージや手洗い講習を体験!現場で実際に対応にあっている感染症専門の医師や看護師からのリアルな指導とあって、いずれも大変好評でした。

### 部署紹介

当院をよく知っていただけるように、各診療科・部門がスライドを作成し上映しました。



特集 2022年 創立150周年を迎えて ~未来へ繋ぐ~

11月4日 国際シンポジウム

150周年WEEK



京都府立京都学・歴史館において、海外協定校から医学部長の先生方をお招きし、国際シンポジウムを開催しました。

150年前の創立時、本学がヨンケル先生を招へいし、医学教育を始めた経緯を振り返るとともに、これから先の100年、本学が海外から学ぶべき事、取り組むべき事、海外へ発信すべき事を時間の許す限り語り合いました。

最後の総合討論には、教員や関係者だけでなく、本学の学生や海外からの留学生にも参加いただけ、様々な視点から国際交流についての意見交換が出来ました。



次 第	第 一 部	150年前の京都
	第 二 部	欧米から見たこれから100年の医療 アジアから見たこれから100年の医療
	第 三 部	これから本学が世界へ発信すべきこと
	総 合 討 論	これからの国際交流

11月5日 記念式典・記念講演・祝賀会

150周年WEEK

国立京都国際会館において創立150周年記念式典を約600名の大学関係者の参加により開催しました。

記念式典では、京都三大学合同交響楽団による演奏、混声合唱団たちばなによる学歌斉唱から幕が開け、竹中洋学長・井端泰彦学友会長による挨拶、彬子女王殿下からのおことばの後、西脇隆俊京都府知事、千玄室裏千家15代前家元他からご祝辞をいただきました。学生による力強い誓いの言葉、そして夜久均実行委員長より挨拶いたしました。記念講演では、総合地球環境学研究所所長・京都大学前総長の山極壽一先生に「未曾有の地球危機に今考えるべきこと」と題して講演をいただきました。

祝賀会は学友会主催で開催され、約400名が参加されました。祇園甲部芸妓連による祝舞、本学の卒業生でプロのバイオリニストとしてご活躍されている石上真由子さんの演奏に続き、山岸久一元学長からの祝辞・乾杯の挨拶により祝宴が始められ、



門川大作京都市長、井村裕夫京大元総長他からの祝辞、歴代学長の佐野豊氏、吉川敏一氏からのご挨拶をいただきました。更に、ラモン・マグサイサイ賞2022を受賞された本学卒業生、服部匡志特任教授に英語でご講演をいただきました。



## 服部匡志特任教授 マグサイサイ賞を受賞

ベトナムで長年、白内障などの手術を無償で行ってきた服部匡志特任教授に「アジアのノーベル賞」と称されているラモン・マグサイサイ賞が贈られました。ラモン・マグサイサイ賞とは、アジア地域で社会貢献などに傑出した功績を果たした個人や団体に贈られる賞で、1950年代にフィリピン大統領を務めたラモン・マグサイサイ氏に由来しています。2022年11月30日、フィリピンの首都マニラにおいて授賞式が開催されました。

### 服部特任教授から

ある子どもの片眼はすでに失明、もう片眼も光だけがわかる状態でした。すぐに手術リストに入れましたが、当日、その子どもは現れませんでした。スタッフに聞いたところ、手術費用が払えないので帰ってしまったと。私は後悔の念で心が苛まれました。それ以来、そうした人がいたら私が肩代わりをするので、なんとんでも手術を受けてもらえるように私からお願いするようになりました。37歳から始めて、幾度も困難や挫折を経験しながらもなんとかここまでやってこられました。多くの皆様方のご支援に感謝しながら。



Photo courtesy of the Ramon Magsaysay Award Foundation (財団からの写真提供)

### プロフィール

本学1993年卒業、日本各地の病院で研鑽を積み、2002年よりベトナム国立眼科研究所で網膜硝子体手術の最先端医療の提供・医療指導にあたる。ベトナムで貧しさから白内障などの治療が受けられず失明する人々を救おうと、約20年にわたり手術や治療を無償で行う。これまでに治療を受けた患者は2万人に上る。

### Greeting

## 創立150周年記念事業実行委員会 委員長挨拶



実行委員長

夜久 均 (附属病院長)

京都府立医科大学創立150周年WEEKの2022年11月第1週は新型コロナウイルス感染症第7波と第8波のちょうど狭間にあたり、トリアス祭前夜の大学本部棟ライトアップに始まり、トリアス祭、チャリティーウォーキング、国際シンポジウム、そして本番の記念式典・祝賀会をほぼ計画通りに開催することができ、我々の歴史の大きな節目を神様も祝ってくれた気がしています。さて、歴史を紐解きますと京都府立医大は明治5年栗田口青蓮院に療病院として産声を上げました。鳥羽・伏見の戦いで負傷を負った藩士を見事に治癒に導いた、その頃日本に入りだした西洋医学を目の当たりにし、蘭学者明石博高(ひろあきら)、京都府参与山本覚馬(新島八重の兄)らが「学問と医療が無ければ国は滅びる」という信念の下、寺社、財界、府民、花街を動かし、当時の榎村京都府知事、そして明治天皇のご支援も受け設立に至りました。その建学の精神は現在の府立医大の理念「世界トップレベルの医学を地域へ」に受け継がれています。もう既に我々府立医大は151年目の第一歩を歩み出していますが、我々の建学の精神、そして大学の理念に根差し、あくまでも地域に軸足を置き、且つ世界レベルの研究・臨床を遂行し、そして次世代を担う医師・看護師の育成に邁進して参ります。今後50年、100年先に向けて、我々府立医大が「創造する未来」を厳しく見守っていただければ幸いです。



## TOPICS

## 第12回4大学連携研究フォーラム開催



ヘルスサイエンス系の教育研究の連携に関する協定を締結している京都工芸繊維大学、京都府立医科大学、京都府立大学及び京都薬科大学による「第12回4大学連携研究フォーラム」が、11月29日、京都府立京都学・歴史館等において開催されました。

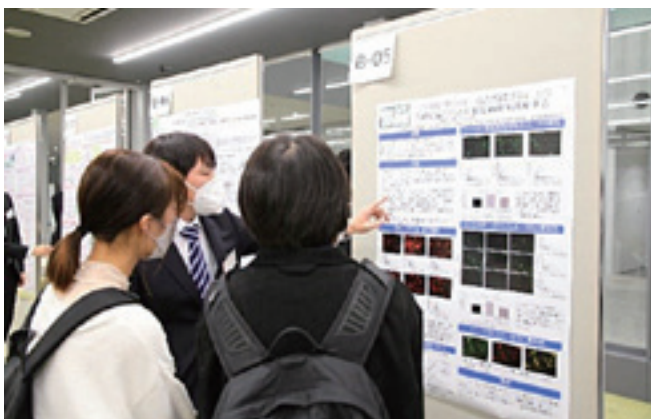
本フォーラムは、4大学の教員や研究者、学生等が、お互いの研究内容に関する情報交換等を行うことによる、共同研究等の学術交流の促進、4大学の研究活動の活性化や研究基盤の強化を目的としています。今年度は新型コロナウイルス感染状況を踏まえ、3年ぶりの対面開催となりました。

塚本康浩 京都府立大学長の開会挨拶に始まり、関西電力医学研究所 矢田俊彦 統合生理学センター長による

「食欲の制御による肥満とフレイルの改善 食と漢方による介入」に関する基調講演、4大学連携・共同研究成果発表が行われ、参加者は熱心に聞き入っていました。

ポスターセッションでは、4大学の教員や研究者、学生等計61名が出展したポスターを前に活発な意見交換や情報交換が行われ、盛況のうちに終了しました。学生部門における優れたポスターに対しては、賞状と副賞が贈られ、本学からは野地亮太さん(医学研究科 統合医科学専攻 神経発生生物学)の「哺乳類大脳半球を繋ぐ交連線維「脳梁」はどのようにして進化したのか?」が優秀賞に選出されました。

つぎのページでは、受賞された研究内容を紹介します!





## 受賞研究の紹介

# 哺乳類大脳半球を繋ぐ交連線維「脳梁」は どのようにして進化したのか？

| 所属教室 神経発生生物学  
| 研究代表者 野地 亮太  
| 所属教室教授 小野 勝彦

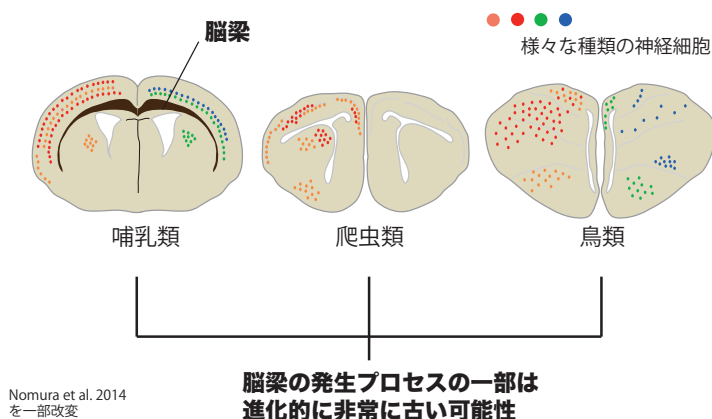
### | 研究概要

脳梁は左右の大脳半球を繋ぐ神経線維束(交連線維)の1つであり、哺乳類脳における特徴的な神経解剖学的構造です。脳梁が正常に作られるためには、胎児期における脳実質の融合と神経の軸索ガイダンスといった複数の発生プロセスが正常に起こらなければなりません。こうした発生プロセスの異常は、ヒトにおける先天的な脳梁欠損(脳梁欠損症)を引き起こすことが知られています。このような患者さんでは知的な発達の遅れやてんかん発作などを併発する例が多く、正常な脳の高次機能に脳梁が不可欠であることが示唆されています。脳梁は胎盤を持つ哺乳類でのみ形成されるため、哺乳類に独特の発生メカニズムが関わっていると考えられます。しかしながら、脳梁の発生機構がどのようにして進化したのか、未だに明らかになっていません。そこで本研究では、哺乳類と同じ羊膜類(胚が羊膜で包まれたかたちで発生する動物)でありながら、脳梁が無いニワトリやスッポンの胚を用いて、哺乳類の脳梁の発生機構がこうした動物でどの程度共有されているのかを検証しました。

### | 結果

- ニワトリやスッポンの大脳において、左右の大脳半球の脳実質の融合が確認されました。これは、哺乳類以外の動物でも脳梁形成の足場となる構造が発生することを示唆しています。
- ニワトリ胚大脳の背側(哺乳類大脳皮質に相当する領域)から大脳の正中領域(中隔野)に向かって軸索が伸長していることが確認されました。すなわち、哺乳類の脳梁を構成する神経軸索のガイダンス機構の一部が鳥類にも存在している可能性が考えられます。

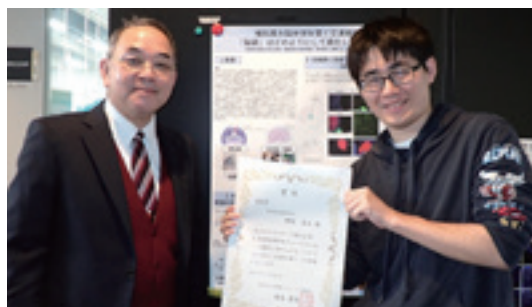
以上の結果は、脳梁の発生機構の一部は非常に古い進化起源を持つことを示唆しています。今後、脳梁の発生プロセスを進化の時間軸で解き明かすことにより、複雑な神経回路の発生機構とその破綻による病態の理解に貢献したいと考えています。



### 受賞コメント

京都4大学が連携し多様な研究発表がされているフォーラムという場において、優秀賞を頂けたことは大変な誉であり、本当に嬉しく思います。ご指導頂いた神経発生生物学教室の先生方にこの場を借りて心から感謝の意を申し上げます。

神経発生生物学 野地亮太さん



## TOPICS

## 看護学教育 — 領域別臨地実習 —

看護学科では、3年生の10月から本格的な領域別臨地実習が始まります。座学で得た知識や技術を実際の看護の場面に展開する経験を通じて看護実践能力を養います。地域で療養しながら生活する人々とその家族を対象に在宅看護実習を履修した学生に実習で感じたことや将来の思いを伺いました。



### キーワード 生活中心の看護

看護学科3年生 山本穂果さん

在宅看護実習では“治療が中心”の病院と異なり、“生活が中心”の看護について学ぶことができました。実際に訪問させていただき、疾患だけでなく利用者さんの家ごとに看護としてのかかわり方が異なるということがわかりました。また、生活中心、つまり利用者さん中心ということからその人がどのように疾患と付き合い、生活していくのか、同じ疾患でも利用者さんごとにアプローチの方法が異なることから、その人の社会背景や生活単位で個性を感じることができます。

在宅看護ではより密な多職種連携が重要であり、私が実習させていただいた訪問看護ステーションでは週に一度ステーション外の多職種とのカンファレンスが行われていました。カンファレンスでは、利用者さんの意向に沿って求める生活を支えるためにも多職種の連携は欠かせないと実感しました。実際にどのような看護が行われているのか、体験や見学を通して自分なりの在宅看護を見つけることができたような気がします。

また、新型コロナウイルスが流行しているこのご時世に実習をできたことは訪問看護ステーションやその利用者さんのおかげであり、私たちの学びも地域の人に支えられていると実感しました。

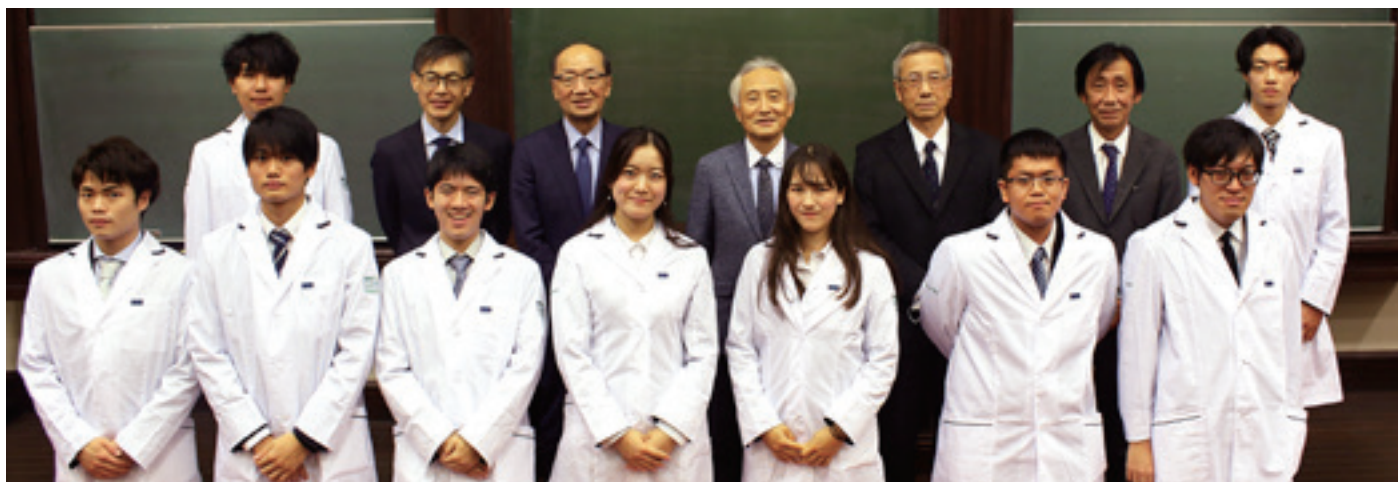
看護学科3年生 潮見彩佳さん

在宅看護の対象者は、退院後も疾患と付き合いながら生活をする人や、難病を抱えている人に加え、近年では独居や夫婦2人住まいの認知症高齢者も増加していて、実際訪問していても認知症高齢者が多かった印象です。在宅看護実習で印象に残っているのが、その家のルール、生活原理が看護ケアに大きく関係するという点です。これが病院での入院生活と最も大きく違う点だと感じました。それに伴って、「生活中心の看護」というものを考えることが必要になってきます。たとえば病院の入院生活では禁煙・禁酒が当然ですが、在宅ではそれらを強制することはできません。あくまでも対象者の生活が軸にあるということを頭に置きつつ、対象者自身の療養に対する考えを見極め、それに合わせてサポートをする、という姿勢を学びました。看護における「その人を知る」ことの重要性を改めて感じる事ができた実習だったと思います。

様々な領域での実習を通して、だんだん自分の看護観が形成されていく感覚があり、刺激的ですごく楽しいです。なにより、受け持った患者さんの言葉が自分の力になっているのを感じて、「看護」の双方向性を日々感じています。ひとつひとつの学びや気持ちを大事にしなが、これからも貪欲に進んでいきたいと思っています。



## 令和4年度 白衣授与式



11月24日、令和4年度白衣授与式が開催されました。白衣授与式は各臨床医学科目及び共用試験(OSCE・CBT)に合格し、臨床実習を行うことを許された医学科4年生の学生たちに教員たちが白衣を授与する記念行事です。白衣は公益財団法人京都府立医科大学学友会から寄贈され、それぞれの名前

や創立150周年オリジナルロゴマークが刺繍されています。

学生たちは1月から附属病院での臨床実習を開始しています。これまで学んできた内容を医療現場で実践し、技術と知識を身に付けていきます。

## 大学フェローシップ

本学は、令和3年度より、文部科学省「科学技術イノベーション創出に向けた大学フェローシップ創設事業(以下、「大学フェローシップ」)」の助成対象に選定され、8年間にわたって総額2億1600万円の補助金を受けることとなりました。支援対

象に選ばれた博士課程学生には研究専念支援金(給付型奨学金)が給付され、京都クオリアフォーラム※での産学連携活動や社会課題解決の取り組みなど、イノベーション創出に資する研究人材育成のための支援を受けることができます。

予想もしなかった様々な危機が地球規模で起こっている現在、ミクロな顕微的視野とマクロな俯瞰的視野を併せ持つ「自ら課題を抽出し解決できる人材」が求められています。日本の縮図とも言える京都にたまたみ、本学は地域密着型かつ研究志向性の公立医科大学として独自の確固たる地位を築いてきました。我々が肌感覚として知る地域社会の課題は、日本の普遍的課題であり近未来の世界的課題でもあります。「大学フェローシップ」事業では、本学ならではのグローバルな視点を生かし未来を切り拓く研究人材の育成を目指します。

※京都の8企業及び7大学からなる「知の共鳴場」を目指す産学連携コンソーシアム



京都クオリアフォーラムの産学公連携イベント等での研究発表や交流の機会を提供

文部科学省「科学技術イノベーション創出に向けた大学フェローシップ創設事業」  
**京都府立医大 次世代育成『2121』フェローシップ**

2025年問題 超少子高齢化 人口偏在・地域格差 人口減少社会 新興感染症

地域の課題は日本の普遍的課題であり近未来の世界的課題でもある

最先端医療の創出  
疾患と治療の医学  
(課題解決を図る未来医療)

疫学と公衆衛生の医学  
(地域社会と自治体を支える医学)

次の100年も探求と実践の医学で社会を支え続ける  
「京都府立医大の人材育成」

生命原理解明と技術開発の医学  
(医学の基盤となるオリジナル研究)

<支援事業概要>  
博士課程学生を対象とした「研究専念支援金」による経済的支援  
京都クオリアフォーラムと連携し産学公による社会課題解決の実践支援

## 新任教授紹介



医学部看護学科・保健看護学研究科  
老年・在宅看護学領域 教授

**毛利 貴子** Mouri Takako

着任日:2022年6月

**略歴:**大阪府立大学大学院看護学研究科博士後期課程修了。2005年9月より京都府立医科大学医学部看護学科入職し、助手、助教、講師、准教授を経て2022年6月本学老年・在宅看護学領域教授に着任。

## 笑う門には福来る

京都府立医科大学医学部看護学科の非常勤助手として着任したのは2005年、それから17年もの月日が経ちました。その間ずっと、卒業アルバムの教員紹介欄には「笑う門には福来る」を記し、だいたい機嫌のいい人であることを心がけています。

看護師から教員になり、高齢者の多い循環器・呼吸器内科混合病棟を中心に、生活習慣病や複数の併存症をもつ高齢患者への看護実践について、セルフケア支援を重視した講義や実習指導を行ってきました。現在は、訪問看護ステーションでの勤務経験や慢性看護学の知見をもとに、介護保険等の関係法令や社会制度の知識を更新しながら教育活動を行うとともに、高齢慢性閉塞性肺疾患(COPD)患者の食行動変容、高齢肺癌患者の悪液質予防に関する研究など、治療を受ける高齢者を対象とする介入研究に携わっています。

医療における多職種連携のように、教育においても多職種連携が不可欠です。共に働く教職員の皆さんが気持ちよく存分に力を発揮できるように環境を整えていくことが教授の役目の一つであると考えています。病院、施設、地域との連携を強化し、これからの医療・看護を担う世代を育て支えていきたいと考えています。

## ケアを探求する

看護実践の中核的な概念として、「ケアリング」という言葉があります。「ケアの本質」の著者ミルトン・メイヤロフは、「一人の人格をケアすることは、最も深い意味で、その人が成長すること、自己実現することを助けることである」と述べています。そして、ケアリングを通してケアする側も成長していく関係性であることが示されています。「一人の人格をケアする」という表現は私にとって大変心に響くものであり、「健康問題に関連した人間の反応」に着目する看護において、ケアに責任をもつことの重要性を示す哲学的なものであると感じています。

私はエンド・オブ・ライフケアを研究領域としていますが、対象者の価値や自己概念を理解し、最期までその人らしく生きるための支援をすることは「一人の人格をケアすることそのものであり、患者さまからたくさんのことを教えていただきました。このことはクリティカルな状況や慢性疾患と共に生きる患者に対する看護においても同様であると考えています。成人看護学・がん看護学では、このケアリングマインドを大切にしながら、学生や大学院生とケアを共に探求し、対象となる人々の暮らしと人生を支えるための知識と技術を備える専門職業人の育成に尽力していきたいと思います。



医学部看護学科・保健看護学研究科  
成人看護学・がん看護学領域 教授

**吉岡 さおり** Yoshioka Saori

着任日:2022年7月

**略歴:**九州大学病院、医学研究所北野病院で看護師として勤務。大阪大学大学院にて看護学修士、広島大学大学院にて看護学博士を取得。2015年より本学准教授、2022年7月に医学部看護学科看護学講座 成人看護学・がん看護学教授に着任。



# KiSAの取り組み

KiSA(KPUM international Student Association)は2019年4月に発足した、国際学术交流センター長直轄の学生団体です。外国人留学生と本学学生の交流促進と相互理解を深めることを目的として活動しています。

KiSAでの一番大きな活動は、留学生との交流を目的としたワークショップの開催です。「お祭り」や「医学生の日常」など毎回テーマを決めて、それに沿ったプレゼンテーションとディスカッションを行っています。工夫された発表を聞いてみると、まるでその国に行ったような気分になります。議論は大いに盛り上がり、時間はあっという間に過ぎしまうのがいつも名残惜しいです。昨年11月の回では、留学生の出身国のクリスマス文化について紹介してもらいました。また、対面で集まるのが難しかった時は、オンラインを活用して開催していま

した。外出自粛の中のワークショップの開催は、参加者にとっても喜んでもらえました。

このほかにも、普段から留学生と交流を深めることもKiSAの活動内容のひとつです。以前は京都や奈良に観光に行きました。最近では、月に2回ほど集まって、アニメや日本食などの身近な話題について語り合っています。対面での活動が増えて、コロナ前の活気を取り戻しつつあります。

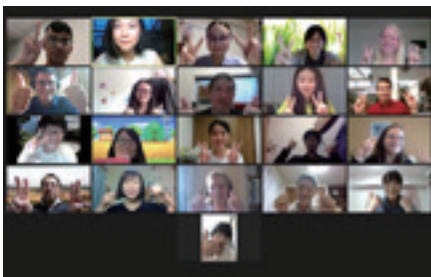
さらに、本学の国際学术交流センター主催のイベントのサポートなども担当しています。150周年WEEKに際しては、海外から来日された先生方と一緒に大原を散策したり、国際シンポジウムに学生が参加したりしました。

最後に、KiSAの設立に携わった卒業生やKiSA現役学生の、それぞれの思いをご紹介します。

低学年の頃に当時有志で行われていた交流の機会のお誘いいただきました。そこで、より多くの学生に開かれ、より持続性のある、より良い交流の場を作る方が良いのではないかと思います。(2019年度卒業生)

国際交流に興味のある同級生が周りに複数いたこともあり、メンバー集めには苦労しませんでした。KiSAで楽しく活動している人たちを見ると英語力よりもコミュニケーション能力や好奇心が必要なのだと実感しています。(2021年度卒業生)

日本では海外の人と話せる機会は少ないので、留学生と交流できるKiSAに入りました。留学生とたわいもない話をしている時間がとても新鮮で楽しいです。(医学科2年生)



## 水野国際学术交流センター長

学生時代から国際交流に興味を持ってもらいたい、留学を早くから意識して欲しいという思い、KiSAの設立・活動を支援してきました。海外・留学という言葉だけでも一歩を踏み出さないと参加できないような壁があります。学年が上になればなるほど医学部ではカリキュラムに追われ、余裕がないと海外を意識することも難しくなり、留学までという意欲も持たなくなってきます。一旦壁ができてしまうと乗り越えることは難しくなります。KiSAを通じて留学生と交流があると、すぐに海外が見えてきますよ。

## 卒業生からのメッセージ

## 目指すフィールドへ、step by step

河原 柚香 さん

ワクチン接種事業で集落の奥地まで足を運ぶ



## プロフィール

2013年3月、京都府立医科大学医学部看護学科卒業、京都府立医科大学附属病院入職。2019年、国際協力機構青年海外協力隊(現JICA海外協力隊)2018年度4次隊看護師隊員としてバヌアツ共和国へ赴任。2020年3月、新型コロナウイルス感染症拡大により外務省命令にて緊急帰国し、6月に府立医大病院に期限付き臨時職員として再入職。翌年4月より東京都青ヶ島村の国民健康保険青ヶ島診療所勤務。2022年10月から現在までドイツ国際平和村にて住み込みのボランティア活動を行っている。

## ドイツ国際平和村での活動

私は今、ドイツのオーバーハウゼン市にあるドイツ国際平和村の宿舎で住み込みボランティアをしています。ここでは、アフガニスタンやイラク、キルギスなどの中央アジア、アンゴラやガンビアなどの国々から、自国では治療が難しい先天性疾患や、紛争や事故による怪我を負った子どもたちをドイツに受け入れて、治療やリハビリテーションを行い、再び家族のもとに返す活動を行っています。宿舎には15歳までの子がいて、治療中や入院前後をここで暮らし、私たちはその生活全般をサポート。朝起こすところから食事の世話、お話をしたり一緒に遊んだりしています。子ども達が心身の傷や痛みを癒し、自国に帰って成長したとき、人種、言葉、文化の違いを超えて共に過ごした



アフガニスタン受け入れ時

ここでの経験を糧に、平和の種を撒いてほしいと願っています。

このような国際貢献は小学生の頃からの夢でした。授業の一環で青年海外協力隊に参加された方の講演や、自分たちで世界の貧困について調べたことなどをきっかけに関心を持ち始め、マザーテレサの伝記を読んで感銘を受けました。そして、「自分ではどうしてもできない状況で苦しい立場にある人達のところへ飛び込んで自分にできることをしたい」、「看護師ならそれができるのではないか」と思い医療の道に進むことに決めました。

## “今”にフォーカスした学生時代

学生時代は、海外で活動することに対して自信をなくしていました。勉強や実習、また国際医療の経験者にお話を聞いたりする

と、自分の技術や能力でやっていけるのか、高校までは夢を見ていけばよかったけれど、それだけではどうにもならない現実と向き合うこととなりました。その頃から部活やアルバイトもして多忙になったこともあり、まずは目の前のこと、今にフォーカスをする毎日へと自然と転換していきました。所属していた女子バスケットボール部はとても充実しており、4年間ずっと現役。チームメイトには国家試験前に心配されて「勉強してください」と言われるほど没頭しました(笑)。でも私にはメリハリのあるほうが向いていたようです。部活は午後5時からでしたが、それまでに「こまめだろう」と自分で決めて勉強に集中できました。そのときそのとき、ささやかでも目標を掲げるのが性に合っているんですね。

アルバイトをしていたのはカウンター席のある居酒屋。お客様は人生の先輩方ばかりで、若い頃のお話を聞かせていただいたり、「看護師さんって素晴らしい仕事だね、頑張ってる」という激励の言葉をいただきました。看護師になることが誇らしく、将来の夢を持ち続けようと改めて思わせてくれた経験でした。

外国に対する意識が変わったのは大学4年生のときに先輩に誘われて行ったインド旅行ですね。衛生や宗教的文化の違いなどにカルチャーショックを受け、お腹をこわし、熱を出しながらも拒絶ではなく“こういう文化もあるんだ”と受け入れられる自分がいて、どこへでも行ける!と思いました。



C8勤務時代





村の子どもたちと



同僚と

## バヌアツ共和国へ、青ヶ島へ

ようやく看護師になっても、初めの3年間は日々の業務についていくのに必死でした。4年目くらいになってやっと自分で考えて看護をすることに手応えを感じ、気持ちに余裕ができてきました。臨床でキャリアを積むことも考えましたが、初志貫徹。条件的にも環境的にも今が海外へ出るチャンスではないか、と。そこから英会話や情報収集するなど本格的に準備を始めました。そして看護師7年目で青年海外協力隊に応募し、看護師隊員としてバヌアツ共和国へ。

私が赴任したのは、医師はおらず、血液検査もできない、乾季には手や傷を洗うにも清潔な水がない、という村で、私も雨水を飲み水にして暮らしていました。意外においしいんですよ、雨水(笑)。そのような状況下で、大学病院での知識や経験だけでは解決できない現実を目の当たりにしました。2年の任期のうち、1年目で活動の土台を作り、2年目でしっかりと実践を行えるよう備えていましたが、新型コロナウイルス感染症の流行により任期半ばで帰国となり、そのまま私の契約任期が切れてしまいます。自分の中に残ったのは、何もできなかったという思い。そこで日本の離島などではどのような医療が提供されているのかを知りたくなり、青ヶ島へ赴任しました。医師一人、看護師一人の環境、限られた資材で工夫し、島の人たちの生活背景を考えながら医療を提供するのはとても興味深かったです。私は島にすっかりなじみ、島民の方々とも仲良くなって楽しく過ごしていましたが、コロナが少し落ち着きドイツの国境が開いたこと、ドイツ国際平和村について以前から気になっていたこと、ワーキング・ホリデービザの取れる年齢制限を目前にしていたことでドイツ行きを決断。島に残るのもいいと思っていたほど大好きな場所でしたから、苦しい選択でした。

渡航まではオンラインでドイツ語の基礎を勉強し、現地では半年間、ドイツ語の授業を受け、ドイツ人家庭で一週間をお借りして生活し、現地へと向かいました。

## 大学院進学も視野に入れて

平和村での任期は4月末までで、その後は日本に帰国する予定です。一旦日本で臨床に戻り、最新の医療に触れ、技術や知識をアップデートして次につなげたいと考えています。その後は再び海外へ赴くかもしれませんし、大学院への進学も視野に入

れています。帰国のタイミングが正職員として入職する時期でもありませんし、大学院へ進学するにしても来期になるので、1年は派遣などで働きながらこれからのキャリアについて熟慮したいと思っています。

大学院を考えているのは、バヌアツでの経験が大きいですね。たとえば支援慣れしてしまっている保健省や医療機関のお金の使い方や、物資が本当に必要なところに行き届いていない現状、あるいは病院では薬品不足というのに患者さんに言われるままの量を渡してしまい、のちに欠品して必要な患者に薬が行き届かなくなることは日常茶飯事で、物品やマンパワーのマネジメントに関しての疑問が多かったです。しかし、意識の違いがあってもなかなか理解してもらえませんでした。人から人へと伝える技術支援は大変有意義なものだと思います。けれど現地での支援だけでは難しいことも多々あり、保健医療問題を包括的に解決へと導く国際保健分野を学んでみたいと思ったのです。

## 小さな一歩を積み重ねよう

考えることや選択の連続だった私が大事にしてきたのは出会いとタイミングです。決して目標が明確なわけでもないし、まだ胸を張って言える成果もない。キャリア設計で悩むことも多いです。でも挑戦し続けることに楽しさを感じています。だから目の前にあるチャンスに気づけるよう、これからも常にアンテナを張っておきたい。そして後輩のみなさんにお伝えするとしたら、ステップを踏んでいけば、その先に様々な選択肢が広がって次に繋がるということでしょうか。どんな看護師になりたいのか思い描き、そこへ向かいステップを踏む。国際貢献をしたいなら、100円募金から始めてもいい、英会話を勉強するのもいい。小さな一歩でも行動すれば辿り着ける場所があります。寄り道したなど感じたことでも、そこで思わぬ出会いを生んだりもします。

私自身はまた次のフィールドへ向かうわけですが、例えば農業と医療をコラボして主に発展途上の国々へ健康支援をしてみたいなあと考えています。農業を通して野菜の摂取量を増やすことを助け、また余剰生産分を市場に出して収益とする。健康教育と生計支援を同時に行うことで、彼ら自身が自立できるようになれば、外部からの支援がいらなくなると思うんです。そうすることで人々の健康や支援慣れという意識を変えていけるのではないかと。果たして将来その道に進んでいるかどうかわかりませんが、私も小さな一歩を重ねていきたいと思っています。



ドイツ国際平和村 : <http://japan.friedensdorf.de/>

## 創立 150 周年記念事業への寄附のお願い

京都府立医科大学では創立150周年記念事業への寄附を募集しております。



1 150周年記念事業基金への寄附、 2 ふるさと納税(個人のみ)での寄附をお選びいただけます。

### 1 京都府立医科大学 創立150周年 記念事業基金への寄附

① 寄附申出書(所定様式)をご記入いただき、事務局総務課150周年寄附担当あてに送付願います。

※下記「お問い合わせ先」へメール・FAX・郵送にてお送りください。

※寄附申出書の様式は、下記URLからダウンロードできます。



<https://www.kpu-m.ac.jp/doc/about/150kifu.html>

② 寄附申出書を受付後、振込口座情報等をメールにてお知らせします。

※受付完了メールを受信後、振込手続きをお願いします。

※振込人名義は寄附者名とし、振込手数料はご負担願います。

③ 振込確認後、寄附金受領書を送付いたします。

※この寄附金は、財務大臣が指定する寄附金(昭和40年大蔵省(財務省)告示第154号による指定)に該当するため、所得税法第78条第2項第2号及び法人税法第37条第3項第2号の規定により税制上の優遇措置を受けることが可能です。

なお、京都府民、京都市民の方は、個人住民税(京都府民税、京都市民税)につきましても優遇措置を受けることが可能です。

### 2 ふるさと納税制度での寄附

#### 専用支払用紙による振込

① 「京都府電子申請システム」への入力、または京都府大学政策課あてに電話・FAX・メールにてお申込みください。

※「郵便局からの払込み」または「金融機関からの払込み」のどちらかをお選びください。

※京都府電子申請システムへは下記URLからリンクしています。



<https://www.kpu-m.ac.jp/doc/about/furusatonouzei.html>

※京都府文化スポーツ部大学政策課の連絡先

TEL:075-414-4526 / FAX:075-414-4187

メール:daisei@pref.kyoto.lg.jp

② 専用支払用紙が郵送されます。

③ 入金確認後、受領証明書が送付されます。

#### クレジットカードでの支払(インターネットから)

① F-REGI寄附支払サイトからお申込みください。

※利用いただけるのはVISA、MasterCard、JCB、AmericanExpress、DinersClubのマークがマークがついたクレジットカードです。

※F-REGIへは下記URLからリンクしています。



<https://www.pref.kyoto.jp/fu-daigaku/news/furusato.html>

② 入金確認後、受領証明書が送付されます。

### 顕彰制度

寄附金額に応じて、寄附者の皆様に感謝の気持ちを込めて、寄附者顕彰制度を設けています。

◎ 銘板への掲示 大学に設置予定の銘板に御芳名を掲示させていただきます(希望により掲載しないことも可能です)。

◎ 感謝状の贈呈

#### 寄附・ふるさと納税に関するお問い合わせ

京都府立医科大学創立150周年記念事業実行委員会事務局  
(京都府立医科大学事務局総務課内)

〒602-8566 京都市上京区河原町通広小路上の梶井町465番地

TEL 075-251-5210 FAX 075-211-7093 email soumu@koto.kpu-m.ac.jp